
パラノーマンズ・ブギー

堀井ドミノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラノーマンズ・ブギー

【Nコード】

N4593Y

【作者名】

堀井ドミノ

【あらすじ】

魔法使いに正義の騎士。超能力者に悪の組織。世間では空想、幻想、夢物語だなんて言われているけれど、そんな一般人には想像もつかないモノで溢れている世界があったとしたら――現代で伝説化されながらも活動を続ける“超常人物達”パラノーマンズ。彼らの間で近年噂されている一般人が居た。都市伝説に都市伝説化されてしまった主人公“亘理 総一郎”を中心に巻き起こる、超常的バトルストーリー！

(序) 怪奇、ギターを持った少年

空がやけに高く見える夜であった。辺りに人は無く、住宅街特有の静けさが辺りを包んでいた。そんな静寂の中を、少年は眼前に街灯の光を見ながら歩いていった。身長は180センチ中盤、身体の線もすっかりとしているが、癖の強い黒の巻き毛に眠たげな眼差しがどこか頼りなさげな雰囲気をかもし出していた。

季節は冬に差し掛かり、1分も歩いていれば冷たい風が頬を叩いていた。少年は赤茶けたよれよれの革製ジャケットのポケットに手を押し込みながら、背負ったギターケースを担ぎ直す用に背中を揺すった。

はあと息を吐き出すと、口から立ち上った息が電灯に照らされ僅かに色づいているように見えた。

「キエテクレナイカ、イマスグ」

少年は好きなロックバンドの曲の一節を口ずさみながら、線路の下に作られた階段を軽やかに降りていく。ガード下に潜り込むように進んでいくと、先程よりも少し背の低い建物群が彼を迎えた。

都心に程近いこの街において、深夜とはいえ人が一人も居ないというのは明らかに異常であった。人が1人も見えないだけならまだしも、電気の点る家の窓があってもそこからは生活音の一つもしない。しかし少年のあまりに自然な足取りが、そんな不自然さをどこか滑稽に見せていた。

「うわっ！」

突然風音以外の物音も無かった空間に、轟音が鳴り響いた。少年は思わず体勢を低くするが、その眼差しは相変わらずで、驚愕に揺らいでいる様子は無かった。

「あそこか」

少年はそう呟くと音のした方へと先程よりも早い足取りで歩いていく。

しばらく行くとやがて公営のグラウンドが見えてくる。入り口には大まかな利用規約の書いた看板が立っており、看板の先、グラウンドの内部から断続的に音と土煙が上がっていた。まるで爆破解体でもしているような派手さである。

「……ふふ、いったいどちらが勝つのかしら」

グラウンドの手前で黒色の長いロープを身に纏ったいかにも怪しげな人間が、グラウンドを見ているのを見つけて少年は立ち止まった。

「まあどちらが勝ったとしても私としてはどうでもいいのだけれど」
ブツブツと喋るロープの人間は、声から察するに女性のようなであった。少年は頭をボリボリと掻きながらその人影に近寄る。

「あの」
「っ！」

少年が声をかけた瞬間、女が飛びのく。その動きの速さたるや、さながら野生動物のようであり、予想外の動きに少年もビクリと肩を震わせた。

女はすかさず腰元から長さ80センチメートル程の棒のようなものを引き抜くと、真っ直ぐに少年に向けた。それを見た少年は慌てて両手を頭上に掲げる。

「君、何者？」

「あー、敵とかじゃないですよ」

「私は何者かと問うているのだけれど」

女の声は底冷えるほど冷たく、その身体から発せられる敵対心も尋常ではなかった。少年は口元に苦笑いを浮かべながら、自分の背をひと筋の汗が伝うのを感じた。

「俺はその、迷子なんですけど」

「……迷子？」

「そう、迷子」

少年の言葉をどう受け取ったのかはわからないが、女はひとまず手を降ろす。それを見て少年も腕を降ろそうとするが、それで勘違

いを生んで攻撃をされてはたまらないと腕を上げたまま女の反応を待った。

「まあ、いいわ。貴方の身体からは魔力も感じられないし。それに――」

女の声は次の瞬間少年の耳元で聴こえた。

「――どうにでもできるみたいだね」

少年は多少驚いたものの、あいも変わらず苦笑いを浮かべたまま、一瞬で少年の背後に移動してきた女に向き直った。

ローブの薄暗い闇の中に、女の長い髪と形の良い口元がちらりと覗く。――良い女だ――少年は一瞬そう思ったが、人知を超えた空間移動であつたり、“魔力”などといった理解不能な言葉を喋るこの女性を口説く気にはなれなかった。

「ちなみに、殺さないで欲しいんですけど」

「嫌よ。だって君、よくわからないんだもの。よくわからないものは嫌いなもの」

「よくわからないなんて……そんな一瞬で決め付けないでくださいよ。まだほんの少ししか会話してないわけですし」

「会話をしたら君の事がわかるのかしら？」

「分かり合えるかはわかりませんが、人間は話し合える生き物ですからね」

少年の独特な物言いに興味を持ったのか、女は少年の腕をグイと掴むと、目の前の木製ベンチに座らせ、自分はその隣に座った。

「それじゃ、お喋りしてみましょう」

「は、はあ」

少年はギターケースをベンチに立てかけると、横に座った女に身体を向けた。女の身長はそれなり背の高い少年からすれば小さいが、女性としては背の高い部類に入るようだった。なによりも彼女の着るローブからはみ出たブーツを履いた足の細くて長いこといったら。それだけでスタイルが良いと一発でわかる。

少年は頭を振った。そんな邪な観察をしているのも、不思議な力

でバレてしまっているかもしれないと思ったのだ。

女は拳動不審な少年を見ているのか見ていないのか、沈黙を守つたままじつと少年の方へ頭を向けていたが、唐突に形の良い唇を舌で一舐めして湿らせた。

「それで、何から話すものなのかしら？」

「へ？」

「私こういうお喋りつてしたことがないの」

「えーっと、じゃあとりあえず。自己紹介でもしましょうか——」

少年は予想だにしていなかった展開に、頭をポリポリと掻きながらヘラヘラと笑った。この後二人はこのとても奇妙な空間の中で、とても不自然な日常会話を始めるのであった。

(一) 事の始まり

—

「いつけ！」

黒いロングコートに身を包んだ青年、村井劉むらいりゅうは怒号とともに腕を振るった。手に持った棒タクトの先から閃光が放たれると、着弾地点から「ぐっ」という声が漏れる。先程まで何も無かったはずの場所から、白く長いマントを翻して背の小さな男が現れた。

「クク、少し、面白い」

男はオールバックにした白髪交じりの頭を撫で付け劉を睨みつける。歳は50を迎えようという所か、皺の目立つ切れ長の瞳には狂気とも取れる感情が宿っており、その身体からは肌がピリつく程の殺気が満ち満ちていた。

「気をつけて劉！ 何か仕掛けてくるよ！」

劉の背後から、彼の相棒である坂井カレンさかいが叫ぶ。

「了解！ 助かるぜ、相棒」

劉はそれに答える。が、カレンは血の滲むセーラー服のまま身体を棒に預けて唇を噛んだ。

——劉に気を使わせてしまった——本来ならばカレンも横に立って戦っているはずだった。しかしカレンが自らの力を過信していた所為で、負傷した身体で戦いを見守ることしかできなかった。

目の前で笑う小柄な男、ピート・フリードマンジュニアは、“黒魔法協会”と呼ばれる西洋の巨大魔術結社において、単身上位の位まで登りつめた凄腕の“魔法使い”であった。

その上、悪評が嵩み協会から除名されてからも尚その力を高めつづけ、現在“大魔法連盟”によって国際指名手配つわものされながらもこうして逃げおおせている兵である。

本来ならば劉の2人で相手をしたところで戦うどころか、相対す

ることすら敵わぬほどの相手だったのだ。

1年前に魔法に目覚め、その後メキメキと力をつけ今では稀代の天才と噂される村井劉と、幼い時より魔術の秀才と呼ばれてきた坂井カレン。2人は、半年前からパートナーを組み、いくつもの何事件を解決してきた。

——劉とならばなんでもできる——まだ15歳のカレンがそう勘違いしてしまうのも仕方が無いことだったのかもしれない。カレンはそんな勘違いからくる根拠の無い自信に後押しされ、この街にピイトが潜伏しているという情報を聞きつけるとすぐに劉と見回りを行った。そして、偶然にも彼らはピイトと出会ってしまった。

結果カレンはピイトに一蹴されこうして見ていることしか出来なくなってしまう、劉が一人であの魔法使いピイトに戦いを挑んでいる。

カレンは自分のあまりの不甲斐なさに、自然と身体に力が入っているのを感じた。綺麗なピンク色の唇から血が滲むが、決して視線だけは逸らさない。

——ピイトを倒す方法を考えなくては——カレンは必死でピイトの姿を睨みつける。早く対策を打てなければ自分達は負ける。

「ちよっ」

カレンが必死に見つめる先で劉は思わず声を漏らした。

単純に威力のある魔法は恐ろしいものだが、それ以上にピイトの魔法は恐ろしい。相手の命を確実に仕留める為に練られたピイトの魔法は、確かな実力や知識や経験を存分に振るうための実戦的なものであった。

「くそ、どうなってんだ！」

ピイトは数メートル先から一瞬にして劉に肉薄し、腕に掴んだ棒を劉に叩きつける。反射神経と直感でそれらを受け止めつつける劉だが、反撃しようにも次の瞬間には、ピイトまた遠くに移動している。

「まるでテレポートだなっ！ いったいどんな仕組みなんだよ！」

また劉の闇雲に振るった棒がピイトのいた場所をすかして宙を泳ぐ。次の瞬間背後から現れたピイトの棒が劉の脇腹を強打していた。「ごふっ」

劉の口から唾液が飛ぶ。必死で距離を取るが、その顔には一つの余裕もない。

「劉！」

カレンが叫ぶが、劉は返事すら返せない。それほどまでに重い一撃だった。

ピイトの小さな身体から繰り出される対術は、確かな経験に裏づけされた巧みさと、見た目異常の破壊力を有している。近接型の魔法を得意とする劉にとって、接近戦で圧倒されるということは、あまりにもショックな事実であった。

——冗談じゃねえ、このままじゃ——劉は痛む脇腹を意識しないよう、何とかピイトを睨みつける。

「もしかして……！」

カレンの声が耳に入る。——何か掴めたのか——劉はその眩きだけで幾分か頭がしっかりしていくのを感じた。精神力で痛みを押さえつけ、ゆっくりと呼吸をする。

数メートル先でぼんやりと立っていたピイトの姿がぶれる。——来る！——劉は腰を降ろし襲撃に備えた。

「っし！」

右斜め後方で魔力の匂いを察知した劉は棒を振りぬく。ガキン、という金属と金属の激突する音が鳴り響く。ピイトは表情一つ変えないまま、棒を引き飛びのいた。

「逃げんじゃねえ！」

「待って劉！」

追撃しようとする劉をカレンが静止する。

「おい、なんだって——」

劉は問いかけようとして直ぐに言葉を止めた。カレンが手に持った棒の先が発光している。それは魔法の練習に使われる魔術で、本

来は懐中電灯代わりに利用する程度しか使用法はない筈だった。しかしカレンが棒を発光させた瞬間、目の前のピイトの姿が消えたのだ。

「偽物か！」
ダミー

「ピイトの魔術は光を使って、姿を消したり物の姿を映し出したりすることよ！ 光の反射を利用している魔術なら、別の光を当てることで消すことができる！」

2人はピイトの魔術の正体を見破った。ピイトは劉から距離を取った時点で自分のダミーを作り出し、二人がダミーに気を取られている隙に姿を消して劉に近づいていたのだ。

精巧なダミーを作り出すだけではなく、その魔法術式を維持したまま姿を隠す魔術を自らに掛け、接近する。仕組みを看破することはできても、そのあまりにも高度な魔術技術に、2人は改めて現在の状況がいかに絶望的なのか思い知らされていた。

「はは、マジモンのマジシャンだなこりゃ」

ピイトは消えたダミーの前に姿を現わすと、可笑しげに口元を歪めた。

「気付くの、遅い。でも、正解」

「あんた……本当にすげえよな」

劉は心底しんどそうに息をついた。ピイトはそんな劉をじっと見つめたままだった。

「そんなすげえ人がさ、何で指名手配になったんだよ」

「人を、殺した。罪もない、人だ」

衝撃的な台詞とは裏腹に、ピイトの表情は何一つ変わらなかった。それはポーカーフェイスなどという言葉では説明しようもない彼の人間性を象徴しているようであった。

「……そうか。それじゃしょうがねえな」

始めから一呼吸おければ良かったのだろう、劉は会話を早々に切り上げて、気合を入れるように首を一周回した。

「さ、やろつぜ」

劉の手に持つ棒が青い発光を放つ。魔術が発動した証拠である。劉の身体から莫大な量の魔力が溢れ、棒へと注ぎ込まれていく。

「クフ、面白い」

ピイトも棒を眼前に構えるとゆっくりと身体の魔力をかき回している。いつでも操れるよう練られた魔力が、ピイトの身体を渦巻いていた。

彼ら以外存在しない深夜の市営グラウンド。時折吹く風だけが、彼らの周りに土煙を上げてその存在を主張していた。緊張感が形となって見えるのではないかと錯覚を起こすほどに空気は張り詰め、両者の間を視線以外のモノが交差しているように見えた。

「劉……！　こんなきつい状況にした私が言うことじゃないけど…

…その」

「言っな。わかってるからよ！」

口の端を軽く吊り上げて駆け出した劉は、常人には出せない素早さでピイトに肉薄し棒を振るうが、またしてもピイトの姿は掻き消え空振りに終わる。

しかし先程の空振りとは違い、その体重はしっかりと軸足に残っていた。

「せい！」

すかさず劉は後方に回し蹴りを放つがこれも空振り。しかし振りぬいた足の先に僅かな空気の揺らぎを感じ取り、劉は蹴り足をそのまま軸にして休み無く棒を振りぬいた。ウオンと狼が唸るような音と共に、棒の先から青い魔力の塊が射出される。

轟音。青い球体がぶつかったグラウンドにはまるで大型の鉄球を叩きつけたかのような大穴ができていたが、穴の中にピイトの姿はなかった。

「外したか！」

「否」

クレーターのようにはっきりと開いた穴の横でピイトが悠然と立っていた。

「マントに、当たった」

ピイトが腕を広げると、確かに彼の羽織るマントの端にかじられたような跡があった。劉は自分の攻撃が相手を捉えていたことに深く喜びを覚えていた。

「マント、ね。そりゃ申し訳なかったな」

「お氣に入り、許さない」

再びお互いの身体に力が入る。既に10分間戦闘を続けている彼らだが、それまでがまるで準備運動とも言える程、その眼は闘志にみなぎっていた。

予想通りそこから戦闘は加速していくかに思われた。間延びした声がグラウンドに響くまでは。

「あのー、ちょっといいですかー」

3人は動きを止めて声の方向へ振り返った。グラウンドの正面入り口、背の高い少年とローブの人物が3人のいる方を見ていた。

「ちよつと、お聞きしたいんですけどー。この空間を造った方って何方ですかー？」

少年が軽い口調で問い掛けるが、劉とカレンは呆氣に取られた様子で、ピイトは怪しいニヤケ顔で、奇妙な乱入者達の問いに答えることは無かった。

「……何かあの人達じゃないっばいけど」

「あの3人の誰かが作った“紙”^{ペーパー}で間違いないわ。ただ、彼らはビックリしているのよ。私も突然君が現れた時はビックリしていたでしょう？」

「『特別な空間で、普通は外からは入れない』だったっけ。だとしたら俺だけじゃなくてシャロンがいることにもビックリしてるんじゃないの」

「そういえば私こっそり見てこっそり居なくなる予定だったのだけれど」

「……それ大丈夫？」

「少し面倒だけれど、どうでもいいわ」

マイペースに話をしている乱入者にいち早く反応したのはカレンだった。

「貴方達何者！」

少年は頭を掻くが、シャロンは少年の反応を面白そうに観察していた。

「やっぱりシャロンのことも知らないみたいだね」

「それはそうよ。私はいつも隠れているから」

「もっとちゃんとした登場の仕方したほうが良かったんじゃない？」

『ふふふ、見ていたわよ！』みたいな感じで

「だったら私は『ふふふ、見ていましたわよ！』の方が上品で好みだわ」

「じゃあそれでやる？」

「嫌よ。やり直すなんて恥ずかしいもの」

「いや、なんかこつちが恥ずかしいわ！ 人が命掛けて戦ってる最中になんだお前ら！」

劉が何とか突っ込む。完全に場の空気はぬるまっており、ピイトにいたっては武器をしまつて完全に観察モードに入っていた。

「あ、すみません！ 俺、ただの迷子なんですけど」

「迷子？」

「すごい方向音痴なんです。それで、俺だけ帰してもらえればと思っています」

少年のとんちんかんな説明に、劉とカレンは頭の上に疑問符を浮かべた。

現在周囲を無人と化している原因は“紙”^{ペーパー}と呼ばれる空間を生成する魔術であった。周辺の空間の情報をコピーし、同時刻、同じ場所の裏側に^{ほんたい}コピーした空間を貼り付けるといふ、古くから伝わる超魔術だ。

完成された形で仕組みが残っていたため、現代における技術の進歩により、ある程度の魔力を持つものならば道具を使うことで簡単に扱うことができるという、現代魔法の中でも他に類を見ない程汎

用性に優れた魔術だった。しかしながら現代魔術はその完成度を超えることが出来ず、一部の高位の魔術士でもなければ簡単に外部からは進入できないというのが定説であった。

目の前の少年からは魔術を行使するための魔力すらまったく感じ取れず、システム上この少年が此処にいられる理由は不可能である筈なのだ。

「なんでお前魔術士でもねえのに此処にいるんだ」

「魔術とかはよくわからないんですけど、たまにこういうところに迷い込んでしまうんです」

「そんな意味不明な説明で納得すると思ってるのか！」

「……ダメだシャロン。あの人達怒ってるよ」

少年は頭を抱えてロープの人物、シャロンの着るロープの端を引っ張った。シャロンは頼られたのが嬉しいのか、胸を張りながら一歩前に進み出た。

「ソーロウの言うことが良く分からないという気持ちは私も良くわかるわ」

「イチが抜けてる！ 俺の名前、総一郎そういちろうだから！」

すかさず少年、総一郎が訂正を入れるが、シャロンは気にせず続けた。

「でも私はこのソーロウと会話をしてわかったの。彼がただの迷子なんだってことが！ 私たちは分かり合ったのよ！」

自信満々に言うようなことではないが、シャロンのその堂々たる立ち姿を見ると、何かすごいことを言っているような気がしてくる総一郎であった。

それだけ言う満足したのか、シャロンは軽く伸びをして黒革のグローブをした手をヒラヒラと振った。

「私もう戦いを観る気分じゃなくなったから帰るけれど。よかったらソーロウのこと、帰してあげなさいな」

「ん？ 帰るって——」

総一郎が振り返った瞬間、シャロンの身体は真黒な煙に包まれた

かと思うと瞬く間に消えてしまった。

「え？ シャロン！？ 帰れるなら一緒に連れてつてくれよ！」

驚きながら辺りを見回す総一郎の後ろで、劉とカレンが頭を抱えながらうなっていた。

「ねえ劉。夢だつて言つて、悪い夢だつて」

「阿呆！ こんなコントが自分の夢だつたら、起きて直ぐ精神科に駆け込むわ！ 夢じゃなくてこれは幻覚だ！」

「幻覚だつたら余計に性質悪いでしょ！ あ、もしかして今のもピイトの魔術じゃ！」

2人は期待を込めてピイトを見るが、ピイトは可笑しそうに笑っているだけで、何かしている様子は無かった。

総一郎は何とも言えない悲しげな表情をしている彼らに、遠慮がちに声をかける。

「あの、大変お騒がせしてしまつて申し訳ないんですけど、ここからは出られるんでしょうか？」

「ん？ いや、まあ出られるけど――」

「悪いけど、出すわけには行かないわ」

劉の台詞をかき消すようにカレンが冷たい声色で言う。

「貴方が何者で、どうやって此処に入ったのか。そしてさっきのロブの女は何者なのか。拘束した上でじっくり話を聞かせてもらうわ」

「いやだから……俺は本当に迷いこんだだけだから、ここがどういった場所なのか詳しくは知らないんですけど」

今度は劉が睨みをきかす。

「あの女がいったい何者かっつのはどうだ。知ってるんだろつ、名前で呼んでたしな。お前の仲間か？」

「仲間とかじゃないですよ。さっきそこで皆さんの戦いを覗いてたシャロンに声をかけて、友達になつたんです」

「はあ？」

「最初は探し物のこと聞こうと思ってたんですけど、あれよあれよ

という間にメル友に」

のほほんと赤色の携帯電話を見せる総一郎に、カレンの堪忍袋は限界を迎えた。

「どうみたってあの女、魔術士でしょう！ 他人の張った魔術結界を自由に入入りするなんて高位の魔術士以外ありえない！ そんな危険人物捕まえて、メル友って！ アホか！」

「カレン！ 落ち着け！」

「こつちが真剣に戦ってる最中に平然と声かけるわ……馬鹿の一つ覚えみたいに迷子迷子って……！ そからかうのもいい加減にしないさいよ！」

怒鳴るカレンの瞳からはポロポロと涙が零れ出していた。このあまりにも滑稽な状況に、感情のたが（・・）が外れてしまったようだった。劉は「あたー」と頭に手を当てている。どうやらカレンと付き合っていると、こういうことは良くあるようだ。

カレンは激しく腫れた右足と、右肩の痛みも忘れて総一郎に詰め寄った。その口はキュツと真一文字に結ばれており、彼女が相当怒っているのだとわかる。

「何が目的なのかいいなさい。でなきゃここで……わかるわよね」

「参ったな……そんなに気に触ると思わなくて。戦いの邪魔をしたのは本当に申し訳ないとは思いますが」

総一郎は困ったように頭を掻いた。

「ただその、一応タイミングは計ってたんですよ？ でもさっきは、危なかったんで」

「危ない？ 誰がだ」

総一郎が指差したのは、涙目で自分を睨みつけているカレンだった。

「さっきからずっと、貴女の後ろ、人が居ますよ」

「は？」

カレンが後ろを振り向くが、そこには誰も居なかった。その場所の異常にいち早く気がついた劉が叫ぶ。

「どけ！ カレン！」

劉がカレンを突き飛ばし棒を横なぎに振るった。直後、先程までは何も無かったように見えた空間に、ピイトが現れ、劉の棒を受け止めた。

「おいおい、洒落になんねえぞ……！ だったらあいつはなんだ！」

劉は脂汗を浮かべながら、先程から笑顔を崩さず立っているもう一人のピイトを睨みつけた。ピイトは無表情のまま腕を振るい、劉の手に持つ棒を弾き飛ばした。

「痛っ！」

「劉！」

しかしピイトは劉を殴りつけるでもなく、魔術を放つわけでもなく、どこかすつきりとした表情で棒をマントの中にしまった。そして恐怖に顔を歪める劉とカレンを無視して、総一郎に顔を向ける。

「迷子の少年、また会いたい」

総一郎は背中の中のギターケースを背負い直すと、ピイトに携帯電話を突き出した。

「良かったら番号交換しますか？」

「ク、クク。携帯電話は、持っていない。探して、会いに行く」

ピイトはマントを翻すと、もう一人の自分に近づいた。次の瞬間、一人目のピイトは白い煙となって霧散した。

「あ、次会うときは変な空間作るのは無しの方向で——」

返答の代わりにピイトが手を叩く音が響いたかと思うと、ピイトを中心に空気がたわんだ。直後、辺りの景色が紙のように皺くちやになったかと思うと、3秒ほどかけて元の風景に戻っていった。

何時の間にか辺りには先程と違いしつかりとした生活音で溢れており、ようやく元の空間に戻ってきたのだと感ずることができた。

「これは酔っつて……」

奇妙な体験に気分を悪くして蹲っていた総一郎が、立ち上がり辺りを見回すと、既に魔術士達は全員居なくなっていた。慌てて携帯電話を確認すると、しつかりとアドレス帳にはシャロンの名前があ

り、ほつと胸を撫で下ろす。折角出来た友人が、魔術と共に消えたのでは巻き込まれ損という気持ちなのだろう。

「……やっぱ!」

突然駆け出す総一郎。携帯の画面右上に表示された時間表記は、とつくに朝といって良い時間であった。

(二) 事の始まり

二

亘理家の長女、亘理日向わたり ひなたが部屋から出ると、ダイニングテーブルに突っ伏して眠る次男の姿が目に入った。

「総くん！ ちょっと！ 起きてよ、もう」

数秒間肩を揺り動かすとようやく黒の巻き毛が頭をもたげる。三月の亘理総一郎わたり そういちろうは、黒いカッターシャツに革製ジャケットという出かけたときと同じ姿のまま、寝癖の所為か爆発した頭で三月を見た。

総一郎のいつも以上に眠たげな眼差しに思わず三月も眠気がこみ上げてくるが、誘惑を振り払い、冷蔵庫からパックのオレンジジュースを取り出す。

「……おはよう日向」「おはようの前にただいまでしょ。昨日何時に帰ってきたの？」

「5時半」

「それって朝帰りってやつ？」

「そんないいもんじゃないよ……ちょっと帰り道迷っちゃって」

総一郎の前にドンとオレンジジュースの入ったグラスが置かれる。

総一郎は「ありがとう」と呟いてからそれを飲み干した。

「呆れた。そんな言い訳今時小学生でも使わないよ？」

「言い訳じゃないんだ、これが」

「なら余計に呆れるよ。誰かに聞けば駅くらい分かるし、駅がわかれば地元まで帰ってこれるでしょ」

責めるような日向の顔に、思わず総一郎は目を逸らす。そんな態度が余計に日向の追及を産んでしまうとは、寝起きの総一郎には考えもつかなかった。

「それがさ、周りに人が居なくて——」

「周りに人が居ないほど田舎にいったの？ 違うでしょ？」

「そうじゃないけど……ほら！ 駅までは行っただけで終電が無くって——」

「終電切れるまで出歩いてたんだったら、それは立派な夜遊びなんじゃないの!？」

完敗であつた。総一郎は両手を上げると、腰に手を当てる日向に頭を下げた。

「……報告するからね」

「葵に言うのはやめて！ 何でもするから！」

「駄目！ 最近多いもん！ いい加減ちゃんと言ってもらうから」

日向は机の上の食パンを乱暴に掴むと、キッチンへ入っていった。総一郎は溜め息をついて再び机に突っ伏す。

「ひなあ、制服似合ってるよー」

「無駄！ それに中学に上がったの4月だよ！」

「通りで着こなせてる！ よっ、女子中学生代表！」

キッチンから出てきた日向は頬をピクつかせながら総一郎を睨みつける。

「それって嫌味？」

「へ？」

上からゆっくりと日向の姿を見ると、背が小さい所為か中学校指定のセーラー服は随分とダボついていた。

「どうせ！ 私は！ 小学生体系ですよ！」

「ちがつ！ 今のは……顔！ そう顔だよ、顔つきが大人になつて来たってこと——」

そういつてから気付く。日向の顔は小学生の頃の面影を残しており、柔らかそうな丸みを帯びた顔は成長の早い中学生の女子にしては幼かった。

「顔が……なんだって？」

「笑っていたほうが可愛いよ、ひなちゃん」

「もう知らない！」

容赦なく頭に飛んできたスプーンを手で掴むと、総一郎は次の攻撃に備えた。しかし既に日向は身を翻し、“アオイ”という紙が張られたドアをノックしていた。

「葵兄、起きて！ 総くんがどこぞの女と朝帰りしてきたよ！」

「あ、ちよつと待って！」

総一郎が静止したときには既に遅かった。ドアはゆっくりと開き、中から長い腕がぬつと伸びると、ドアをゆっくりと開いていた。

「おはよう、葵兄」

亘理家の長男、亘理葵は浅黒い肌を黒いタンクトップを着込んだ青年であった。その身体は程良く引き締まっており、彼が何らかの運動を日常的に行っているのは明らかであった。

葵は胸にぶら下がっていた眼鏡をかけると、切れ長の瞳で日向と総一郎を見た。

「おはよう、日向」

「お、おはよう」

「お前は……何がおはようだ」

総一郎は急いで立ち上がると直立不動の体勢を取った。

「女と朝帰りだって聞こえたんだが、俺の聞き違いか？」

「いや、聞き違いではないけど、違うんだ」

「何時に帰った」

「じゅ、12時」

プレスシャーに押され嘘をつこうとする総一郎だが、すかさず日向が訂正する。

「5時半に帰ったんだってさ」

「理由は」

「み、道に迷ったんだよ」

「ふざけてるのか」

「本当なんだって！」

眼鏡を押し上げた葵はツカツカと総一郎に歩み寄ると、自分より背の高い総一郎のシャツの首元を掴んで自分の顔に引き寄せた。

「いいか、総一郎。俺はお前のやっているそれがどういふものなのかは知らない」

葵が目線を向けたのは、壁に立てかけてある総一郎のギターケースであった。

「だがな、まだ17歳の男子を深夜まで拘束し、家族に心配をかけさせるようなものを、俺は絶対に認めない」

「違う！ バイトは関係ない、本当に。ビリーの店は10時前には出たんだ」

「だったらお前自身が問題だったんだな」

葵が鋭い瞳で睨みつけると、総一郎は諦めたように顔を逸らし溜め息をついた。

「……ああ。店を出た後、終電を逃すまで徘徊してた」

「謹慎だ。今日から仕事が終わった後は俺が店まで迎えに行く。それ以外は家から出さん」

「わかった……悪かったよ」

「これからは心配をかけるな」

葵は総一郎の首を離すと総一郎と仲直りのハグをした。何か揉め事があった時は終わった後にハグをする。亘理家の決まりであった。日向はそれを見てほっとしたように顔を綻ばせる。

肩を寄せ合う2人は、そんな日向の方をちらりと確認してからゆっくりと顔を近づけた。

「……何があった」

葵が口元を動かさないように総一郎に囁く。日向には気付かれないうちに、総一郎もできるだけ葵の耳に口を近づけて話す。

「魔術士の戦いに巻き込まれた」

「魔術士？」

「無人の空間で殺し合いしてたよ」

「そうか、詳しい話は今晚」

葵の身体が離れると、総一郎は首元を直して日向に頭を下げた。

「日向もごめんな」

「私はもういいよ。でも、あんまり心配かけないでね」

「ああ、気をつけるよ」

日向は葵が不機嫌そうな表情で部屋へと戻るのを見届けると、椅子に座り焼きあがったパンを皿によそった。

「総くんも早く制服に着替えなよ。2度寝しないうちに」

「そうだな、遅刻なんてしたら葵に謹慎伸ばされちゃうし」

部屋に戻ろうとする総一郎と入れ違いに、青いジャージを着た葵が部屋から出てくる。葵の働く企業では、社員の健康維持のため業務開始前に社内のジムでの運動を義務としているらしく、葵は出社時はいつもジャージで出かけているのだった。

「もう出る」

「ご飯はいいの？」

「向こうで食べる。あまり時間がないからな、誰かのせいで」

「お仕事頑張ってるね」

「日向も気をつけるよ。……総一郎！ 先に出るぞ！」

「いつてらっしゃい！」

部屋から声をかける総一郎の声を背に、葵はジャージに革靴という何ともシニールな格好で家を出て行った。

「総くん！ 私も朝練あるからもう行くけど、パンとジャムここに

……」

朝食を食べ終えた日向が総一郎の部屋を覗くと、総一郎は制服を着かけたまま布団の上に突っ伏していた。

「コラ！ 起きろー！」

ドスンという音と総一郎の叫び声が同時に聴こえたのは直ぐ後のことであつた。

私立早乃塚高校の2年教室にて。

「私の気のせいならいいんだけど」

昼休みのチャイムが鳴り響いて数分後、教室の中心に座る総一郎の前で、髪を後ろで結んだ活発そうな女子生徒が、ボーっと座る総一郎の顔を覗き込んでいた。

「亘理さ、朝からずっとそうしてない？」

総一郎は器用に視線だけを少女に向けると乾いた笑顔を浮かべた。

「ん？ 清水、どうかした？」

「いや、どっちかっていうと私がどうかしたのか聞きたいんだけど

……」

清水典子はキツイ目を細めて呆れたように頬杖をついた。

「ちよつと寝不足でさ」

「だったら寝たらいいんじゃないの？ すごい辛そうだよ」

「周りに人が居ると寝られないんだよね」

典子は「ふうん」と呟くと、前の席に集まっている他の女子との談笑に戻った。総一郎は再び眠気と格闘するため、頭を空にして宙を眺めていた。

「あ、そういえば。私土曜に亘理君とメールしたんだよね」

女子が談笑する会話の中に自分の名前が出てきたのを聞くと、総一郎はそちらに視線を向けた。

メールをしたと話すのは三郷有みさとゆうという少女で、先日管弦学部の楽器を体育館に運ぶのを手伝った時にアドレスを交換していた。

「マジ？ 亘理ってメールとかするんだ」

こんなに近くに本人がいるのだが、あくまで彼女達には自分達以外は見えていないらしく、聞き耳を立てるまでもなく聴こえるような大声で話を続けていた。

「私もアドレス知ってるよ」

「私も」

「え！？ 嘘、知らないの私だけ！？」

嫌な予感がした総一郎は席を立とうとするが、典子はその腕をしっかりと掴んでいた。

「ちよつと亘理。私今結構ショック受けてるんだけど」

「ご、ごめん」

「それは何？ 私には教えたくないってこと？」

「違うつて！ 清水はその、席が前だからさ」

「前だから何？」

「良く話すから、えっと、メールする必要が無かったんだよね」

清水は口元にさながら肉食獣のような笑顔を浮かべた。

「そうなんだ……でも私を傷つけた罰としてさ、ちよっと私と一緒に話そうよ」

「は？ 何で」

「そういえば、亘理って2年になってから転入してきたんだったよね。それにしても話題に出ること少なかったし」

総一郎が何か言おうとする前に、あれよあれよと総一郎は女子の囲む机の中心に立たされていた。

「よし！ 今日は亘理を掘り下げようの会臨時結成！」

盛り上がる女子4人に囲まれた聡一郎。身体が危険を察知したのか、先程までの眠気は完全に飛んで、眠たげな目に不安を湛えていた。

「うわあ、やっぱり亘理君って背高いよね」

ロングヘアの前髪の隙間から、有の大きな瞳が総一郎を見つめる。

「しかも、私の見たところによると、相当身体鍛えてるね」

陸上部の典子は、顎に手を当てて値踏みするように全身を見ていた。総一郎は何とも落ち着かない気分で、そのセクハラともいえる視線に耐えていた。席を囲む他の2人は隣のクラスの生徒で、総一郎は名前を知らなかったが、クラスメイトの2人と同様に面白そうに此方を観察している。総一郎はさながら動物園の檻に入れられているような気分だった。

「おい清水！ 身体なら俺のを見ないか！」

そんな総一郎達に、教室の窓際でサッカー部の真田勇徒さなだ ゆうとが上半身を脱いでポーズをとりながら声を上げた。その周りで男子達が大笑

いていた。

「そんな半端な身体じゃあ直ぐに風邪ひくわよ。いくら馬鹿でもね」
典子の何とも容赦の無い返しに、勇徒は「言われてやんの！」と男子達にはやし立てられていた。

しかしその様子を見ていた教室中の男子が、“誰が一番いい身体か”と一斉に脱ぎ始めたからさあ大変。教室は一転お祭り騒ぎとなった。

女子達もキヤーキヤーと騒ぐ割に、しっかりと見ているあたりちやっかりしているといふかなんというか。総一郎もこの騒ぎに乗じて脱出を試みようとしたのだが、典子がそれを見逃す筈も無く、別の教室へと連行されることとなった。

結局隣のクラスの女子は、男子のいい身体選手権を見るために教室に残ったようで、典子と有と総一郎の3人で廊下を歩いている。

「……亘理つてもしかして男子からはぶられてる？」

「そんなことないよ」

「でも、休日遊んだりしないでしょ？ 部活も入ってないし」

典子のはつきりとものを言う。そういったところが男子から女子からも人気である理由なのだろう。学校で余り喋るほうではない総一郎も、積極的に話し掛けてくれる典子の性格をとても気に入っていた。

「ちよつと事情があつて、放課後はアルバイトしてるから。部活とかは無理なんだよ」

「アルバイト？ バイト禁止でしょ、うちの学校」

「俺の家両親が居ないから、兄弟だけで暮らしてるんだ。だからしてもいいって学校から許可貰ってる」

流石にこの返答には典子も口を閉じてしまった。言っている本人から話しているのだから気にする必要もないと思うのだが、人一倍相手に気を使う彼女らしい素直な反応であった。

止まってしまった会話に、総一郎がどうフォローを入れたものと悩んでいると、今まで話を聴いていた有が総一郎に笑顔に向けた。
「何人兄弟なの？」

「俺入れて3人。中学生1年の妹が1人と、3つ上の兄が1人」

「結構離れてるね、歳」

「まあ、ね」

流石にここで複雑な家庭事情を総て話すわけにもいかず、総一郎は苦笑いで頬をかいた。何ともいえない空気を引きずったまま廊下を歩いていると、目的の教室に到着らしく歩みが止まった。

「音楽室でいいよね」

「私は構わないわ」

「俺も」

有が先頭にたつて音楽室に入ると、暖かい空気が3人を迎え入れた。教室の前方にガスストーブが置かれているだけの普通教室とは違い、楽器の置いてある音楽室は、気温で楽器の音の変わってしまったのを防ぐために冷暖房完備であった。

3人が暖かさに酔いしれていると、「先輩ー来たんですかー」と有が声を掛けられていた。どうやら1年生と2年生の管弦楽部員が、昼休み昼食を食べるため音楽室に集まっているらしかった。

総一郎が「3年生は？」と聞くと、3年は隣の音楽教員室で先生と食べるのが決まりだと教えられた。部活動に入ったことの無い総一郎には、そういった上下のある関係性が少し新鮮でもあった。

「三郷先輩の彼氏ですか！」

「それとも清水先輩の？」

「ち、違うよ！」

「ふふふ、これからこいつを丸裸にするとこー！」

——女子って、すごい——後輩達の元気な声に負けなくらい元気な声で返すクラスメイト2人を見ながら総一郎は溜め息をついた。最近じゃ口喧嘩で妹にすら勝てなくなってきたのを思い出し、更に吸う息が重くなる。

典子はうなだれる総一郎の肩を叩くと、部屋の隅に積み上げられた椅子を指差した。総一郎は言われるがままに椅子を3つ持つていくと、椅子は三角形の形に並べられた。

「それじゃあ改めて……つと、亘理は昼食抜き……？」

「抜きだけど……別に金が無いからとかじゃないよ？ 小食なだけで」

「朝何食べてきたの？」

「パンと、後ジャム。いちごのやつ」

女子2人は顔を見合わせると、弁当の蓋に色々と弁当の具材を乗せて総一郎に差し出した。

「え？ 何？」

「食べなさい」

「ちょ、悪いから」

「据え膳食わねば男の恥つていうでしょ。それに——」

典子が総一郎にググイと顔を近づける。

「——察しろ。何も食わない男の前で弁当を食う女の気持ちを」

「……頂きます」

こうして食事を開始した3人。

総一郎は分けてもらった弁当をつまみながら、どれが美味しいか、等を聞いてくる2人に答えながらのんびりと昼食を楽しんでいた。

総一郎としてはそれで良かったのだが、典子がはっと何かを思い出したように顔を総一郎に向けた。

「あ、そういえば亘理を掘り下げる会だったね」

「そうだった、忘れてたね」

——忘れてくれて良かったのに——総一郎は頭を掻いた。

「亘理つて、普段どんなことしてるの？」

「どんなこと……そうだな、音楽聴いたり、妹と遊んだり、家事とかも当番制でやってる。後はもっぱらアルバイトかな」

「そのバイトつて週にどれくらい？」

「大体週に6日位。仕事がこなければ週3とかの時もあるけど」

「へえ、何のバイト？」

総一郎は視界の隅に授業用のクラシックギターを見つけると、立ち上がって一本を掴み上げる。

「え？ 何、どうしたのいきなり」

ギターを手に戻ってきた総一郎は、2人の前にギターを差し出した。

「これを弾くバイトしてるんだ」

「えっと、ギターを弾くアルバイトってこと？」

「そ。……三郷、これって弾いてもいいの？」

「い、いいと思うけど」

総一郎はギターのチューニングを始める。教室に放置されていることと、授業で使って沢山の生徒が扱うことでかなり状態は酷かったが、総一郎は弾ければいいといった様子で黙々と音を合わせていた。

ギターを触っている総一郎の顔は教室では見たことも無いほど真剣で、それを見ていた2人は思わず顔を見合わせた。

「亘理がギター弾いてるなんて知らなかった」

「私は意外……でもないけど」

「有、知ってたの？」

「知らなかったよ。夏のコンサートのリハーサルの時に、亘理君が機材運ぶの手伝ってくれたんだ。その時に楽器の扱いがすごく丁寧だったから、何かやってるのかなーとは思ってたんだ」

「ふーん……助けてもらっちゃったわけだ……。怪しいなあ。そういえば有、亘理とメールしたって言ってたけど、どんなメールしたの？」

「それは秘密」

2人の会話を余所に、総一郎は弦をつま弾いた。最初は感触を確かめるように弾いていたが、だんだんと音の数が増えてくる。

何時の間にか教室内の殆どの生徒が談笑を止め、総一郎のギターを聴いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4593y/>

パラノーマンズ・ブギー

2011年11月14日03時31分発行